

[http://gigazine.net/news/20070309\\_commissar\\_vanishes/](http://gigazine.net/news/20070309_commissar_vanishes/)

ジョージ・オーウェルは全体主義に反対する社会民主主義者だ。彼は『カタロニア賛歌』というルポルタージュや『動物農園』、『1984年』といった小説を書いた。彼は評論で、そして、小説で、政治的な見解を表明した。彼の出世作『動物農園』は共産主義の腐敗を批判していて、一般に、ソ連を批判した小説として読まれている。『1984年』は全体主義を批判した小説で、これもしばしばソ連と共産主義を批判した小説だとされるが、『1984年』に関していえば、オーウェルは、それを否定している。

全体主義のあらわれる可能性は20世紀のすべての統治機構にひそんでいる。オーウェルは特定の国の全体主義や独裁主義を批判するのではなく、全体主義や共産主義全般を、そして掌握された権力と権力者を批判している。たとえば『1984年』の世界では、オセアニア、ユーラシア、イースタジアという三国が世界を三分して支配しているが、この三国の政治原理は明確ではなく、しかし、共通して全体主義体制をとっている。

『カタロニア賛歌』はスペイン内戦のルポルタージュである。オーウェルはイギリス独立労働党の機関紙「ニュー・リーダー」の特派員としてスペインに入国して、およそ半年間、共和国側（おおむね左翼）の勢力のひとつ統一マルキスト労働党に参加する。注意しておきたいのは、スペインの労働者がフランコ軍に対して民主主義の名のもとに立ちあがったのではなく、(大勢として)社会革命を目的にしていたことだ。

ロシアは義勇軍を派遣して、物資を提供した。共産党の影響力を高めるためだ。それで共産党と社会党によるお決まりの権力闘争があった。共産党が優位だった。共産党は（他にも理由があったが）アナキストに弾圧を加えた。共産党が革命を主張する労働者を弾圧して、革命を阻止する動きをしたことは、オーウェルに衝撃を与えた。共産党が政府内で権力を掌握すると、政敵を倒す動きをみせていた。スパイが横行していた。オーウェルは統一マルキスト労働党に入ったということで危険があった。オーウェルは、共和国内の争いを体験して、ファシズムだけでなく、共産主義にも全体主義的な側面があると思う。それとともに、市民戦争に関するニュースが、たぐらみでつくられた虚偽を報じていることに気づく。オーウェルは、権力は過去を改変して報道することを知る。

『1984年』の主人公ウィンストン・スミスは真理省に勤めていて、仕事は記録の改変である。これにより党はまちがわなないということが記録によって証明される。スミスはたとえば『タイムズ』誌を改変するが、すると、真理省はあらゆる該当号を蒐集してすべてを改変する。人々は改変される前の紙面を読むことができない。改変された事実は隠匿される。

人々は党に反対する意見を述べてはならないし、考えるだけでもいけない。また、個人的な記録を残してもいけない。それらの犯罪は思想警察によって発見され、逮捕、拷問、治療されたうえで殺害される。逮捕は公表されない。その人物の死後、その人物に関する記録はすべて抹消される。スミスはこの社会にあって、日記に次のように記す。

自由とは二足す二が四になると言える自由だ。これが容認されるならば、その他のことはすべて容認される。

スミスは逮捕され、拷問されている。その場面は324ページから328ページだから、ぼくは少し長い

けれどそれを読む。

オーウェルが描いている全体主義への警告は、報道は偽られること、過去は変えられること、たったひとつの正しい意見だけしか参照できなくなること、「二足す二が四になる」と言えなくなること、不都合な記録が抹消されること……。

まあ、おおむねそんなことが、読みとれる。

ところで今からマッカーシズムの話をする。舞台は 1950 年代の米国。

1952 年のギャラップ社の市民意識調査によれば、75%の米国民は、共産主義者の市民権は取りあげるべきだと考えている。政治思想にまつわる不寛容はマッカーシズムの温床になった。Magruder's text on American government は 1949 年版で世界政府用語の考えを示していたが、共産主義的だと攻撃され、テキサス州などで禁書に指定された。テキサス州サンアントニオでは、愛国団体が非米図書リストと図書館の蔵書目録を照合して、問題のある図書…たとえば『相対性理論』など…の背にラベルを張った。「望ましくない図書」に寛容な図書館員には、解雇要求と圧力があり、多数が解雇された。

愛国団体アメリカのためのテキサス人によれば、議論のある事柄の両面を教えることは、若者を混乱させ、不十分な証拠をもとに早まった判断をさせるため、成長するまでは、アメリカサイドのみを教えるべきである。この愛国団体はニューディール政策、国連、人種差別撤廃などに賛成する教科書に抗議して、7種を撤回させた。

ぼくはマッカーシズムによってもたらされたこれらの事件を学校と公共図書館から、敵国の主張に近い（とされる）書物を排除する行為だと解釈している。これは検閲と呼ばれている。検閲は実行者の政治思想に基づいて行われる。愛国的な書物ばかりがならば公共図書館をイメージしてみよう。ぼくらはそこで正しい意見しか読むことができない。

『動物農園』は 1954 年にアニメ化されているが、アニメ版の結末は原作と違う。CIA が反共プロパガンダのために出資していたからだ。「アニメーション化の経緯」以下を読む。

<http://www.ghibli-museum.jp/animal/neppu/kawabata/>

原作も見る。

<http://www.nytimes.com/2000/03/18/books/how-the-cia-played-dirty-tricks-with-culture.html>

ぼくは民主主義国家によって物語の結末が改変されたことを残念に思う。それから、CIA が『動物農園』のラストに口出しして改変したこと、ウィンストン・スミスが『タイムズ』誌を改変したことは似ていると思うし、「正しい」ことしか書かれていない『タイムズ』誌の読者は、結末を変えて反共プロパガンダに利用されるかつての風刺映画を見る米国民と似ている……もつとも、動物農園の結末が違うことは、すぐにバレたんだけど、バレていてよかったとぼくは思う。

最後にテキストの一節を引用する。「マッカーシズムの大々的な進展、すなわち本物の共産主義者または誤って共産主義者と思われた人々の追及は、冷戦の一時的な影響だった」

全体主義はあらゆる政治体系から生じる可能性がある。社会主義国家ソ連から生まれたそれはスターリン主義と、民主主義国家アメリカから生じたそれはマッカーシズムと呼ばれていたが、さいわい、マッカーシズムが「全体」に及んだのはいくつかの州だけで、アメリカ全土ではなかった。